

第 17 話〈外録銀山〉の要約と参考資料

第 17 話〈外録銀山〉の要約

山口保明さんは、外録銀山に光を当てた唯一の民俗学者でした。1976 年に書いた「山弥時代の土呂久」は、地底におりて体を張って鉱石を掘り出す坑夫や、山の斜面に建った床屋で銀をふくむ鉱石から純度の高い銀を精錬する“かね吹き”の景色をみせてくれます。

第 17 話〈外録銀山〉の参考資料

17-1 山口保明「山弥時代の土呂久」(鉱脈 11 号)より

調査年次

去る 43 年秋、近隣見立地区(註・西臼杵郡日之影町)に引きつづき、鉱山における民俗・歌謡を探り求めての予備調査実施。(P4)

翌 44 年夏、調査員に江藤輝文・興梠良臣両君の協力を得て、第 2 次の調査に入る。岩戸神社までバスで行き、ここから約 6 キロの道程を土呂久まで歩くという、炎天下 20 日間に及ぶ、3 人同行の現地調査と古老への聞き書きがはじまる。(P4~5)

第 3 次の豊後方面の調査=P6 の記載より 48 年度と思われる (P5)

去る 48 年度の調査につづいて、過日=原稿執筆が 50 年 10 月なので 50 年であろう=、山弥の事蹟を求めて再び豊後路に入る。(P6)

*山口保明の経歴によると、昭和 43 (1968) 年 4 月~昭和 50 (1975) 年 3 月まで宮崎県立高千穂高校に在職している。赴任した年の秋に見立、土呂久で「鉱山における民俗・歌謡」を探る予備調査をおこない、翌年の夏に学生 2 人の協力を得て、炎天下 20 日間の土呂久現地調査と古老への聞き書きを始めている。三弥の事蹟をもとめて、大分に行ったのは、それから 4 年後のこのようだ。(川原)

文献資料

土呂久の鉱山における歴史は、むしろ近世末に始まるといってよいのである。それ以前の記録は既になく、その詳細はつかめない。近代に係わる資料すら失なわれ、また失われつつあるのである。「土呂久銀山」に係わる直接の記録資料としては、管見に入る限り、慶応 4 年 (1868) の『土呂久銀山覚書』と明治 17 年 (1884) の『宮崎県日向国臼杵郡岩戸村字向土呂久銀山ニ係ル取調書』の 2 部だけである。(略) それ以前の土呂久銀山に係わる記録は、『土持日記』や『矢津田文書』等に、わずかに散見するだけで、まさしく欠落の歴史というべきである。(P5)

周辺展望

冷気に満ちている土呂久の林道を登っていくと、古祖母への登山口、そのやや上手に営林のための事業所と一かたまりの家屋。ここからは、その昔繁栄を極めたであろう、土路久(外録)の村は眼下である。溪谷筋を底にして、逆三角形に両壁の山が迫っている。さらに、大分県境の尾平鉱山への道を登って行くと、展望所が設けられており、ここか

から見下ろす観景は、遙か下方へ伝説の山、二上山（註・高千穂町押方）が望まれ、背には九州山脈の尾根が走り、左に山裏（見立）とを隔てる山々が群立し、右は古祖母。この峻険の地にひらけた土呂久銀山・登尾銀山・見立錫山・吹山鉛山等々、各山のかなやまから、その昔、かね吹きの^{けむり}烟がたちのぼっていたなどとは、考えも及ばない。あるいは、ここに藩の財政を背負った^{かなやまし}金山師たちの哀史があったなどとは、到底思われない。それほど雄大な景観を呈しているのである。（P4）

時代背景

果たして一介の商人が（略）莫大な資金と労力と手腕を要する、鉱山開鑿に手をそめられたかどうか。（略）（三弥の祖父・父の）氏寿・氏定の親子が、時の藩主竹中重隆・重義の二代にわたって、深い結びつきをもっていたことは確かであろう。この時代は全国的にみても、金銀鉱の最も盛んに開発された時期である。山弥の在世は、戦国末期から江戸開幕を経ての時代にあたり、専ら金銀山の採掘は、戦国大名の資金獲得政策のもとに進められてきた（略）従って、藩政初期には各藩においても、金銀山の開発に力を注ぎ、藩自ら保護を与えて推進したのである。（P11）

経営形態

家康の政策においては、さらにこれを強化して、主要な鉱山については、これを直轄の領となし、一方繁栄を極める諸山については、これを上知させたりしている。同時にまた各藩における、鉱山の試掘・開発等は幕府へ上申して、許可を得ることが必要であった。（P11）

推測の域を出ないのであるが、藩の後見による、いわば山弥の自分山という形で、開坑されはじめたのではなかったろうか。山主的存在であれば、手腕をふるうのも己れの力量にかかってくるし、同時にまた一攫千金の夢を追うことも叶う立場である。（略）当時の藩主竹中氏と深い交渉があったとすると、運上山であると同時に、自分山という性格の強い形態がとられたのではなかろうか。（略）鉱山の経営は藩の財政を豊かにすると同時に、この場合、山主が大量の出鉱物を所有することも可能である。（P11~12）

「旧坑」を「山弥坑」とか呼んだりしているが、領有形態を知る上に、それら伝承の中でも興味を引くのは、「公床千床」「私床千床」とともに、現在の紫金原と道元越との間に山弥自身の持ち山をつくり、今もそれを「囲い山坑」と称している。さきに述べた領有形態と符合する伝承である。（P17）

鉱山労働

鉱山の業を支える中心は山師であろう。それは採鉱方と選鉱製錬方とに、大きく二分されようが、大がかりな直山では主にこれは分業形態をとるのが普通である。つまり、掘り大工方と吹き大工方に分かれるのである。（略）鉱山を運営するには、いわゆる山師に属する金掘り役（掘り子）・手子・木挽・水引・砂防・鍛冶等を役とする人たちが必要であるし、製錬方においても、吹き大工・差し手子・^{くさり}鏈持ち・炭焼き方など多くの人数を要する。（略）土呂久には「渡り坑夫」の話も残されている（略）ちなみに土呂久では、

加賀・能登・伊予・紀州・難波あたりから来ていたという。(P14)

これらのことを総合して考えてみると、鑿と槌で掘り進む、そして掘り出された鉱石等の運搬は、義雄氏や常義氏がいうように、土地の婦女子までもカルイを背負って、堅坑のきざはしを上ったのであろうか。(略) 湿った石を鎚で叩いてみてもわかるが、その粉塵は大変なものであり、明かりの油煙も、またその心と身体を蝕んでいったに違いない。土地の人たちも「坑夫は長生きしないものだ」という。(P16)

『取調書』によると、掘採の方法について、「在来ノ旧坑ニ依ル」(第12条)とし、坑夫の工程は「鑿・前捧・鶴嘴・玄翁・山槌ノ類」(第18条)を用いるとある。(P18)

製錬法

製鉱の方法については「石畳ニシテ深サ凡ソ四尺、巾三尺四方ノ角ナル炉、吹方ハタタラ吹き」(第13条)と記し、薪炭消費高については「鉱石八十貫目ヲ製スルニハ、樫炭四十貫目ヲ消費ス」(第14条)とある。ちなみに産出量についても触れ「鉱石八十貫目ニテ鉛三十五貫目、正銀ハ三百五十目ヲ得ベシ、即チ一分ノ割合ナリ」(第15条)とある。これらの記事によれば、明らかに明治十年代にはタタラ吹きが行われているが、遡って三弥の時代は、手吹きフイゴによる操作であったと推定される。土地の古老たちの伝えるところによると、例えば義雄氏は「土壁の大きな炉をつくり、鉱石と木炭を混合して投入し、畳一枚ほどのフイゴを5, 6丁並べ、一切一致で送風する。そして炉から土で固めた溝をつくり、それを通じて流れ出る溶鉱を箱型の舟で受け、それをそのまま箱詰めにして、外国へ向けて送り出したものだ」という。(P18)

清八氏によれば「六尺フイゴを用いたものだ」といい、兄が精錬用の木炭(吹炭)を出していたという佐藤住義氏によると、「五尺フイゴを二丁並べて、炉に向けて吹くが、その炉には、樫炭で良質の長い炭棒を渡して、これを渡し炭といい、その上に鉱石を乗せる。下方に金壺を仕組んで、銀が流れ出てくるのを溜める作業の過程を、子供の頃実際に見た」という。これは、恐らく灰吹銀の精錬であったろうか。(P19)

『和漢三才図絵』等をみると、「鞴^{ふいご}」と「踏鞴^{たたら}」の絵図が出ている。(略) 鹿の皮から狸の皮へと変わり、箱造りに改造されて大型化するが、本来、手で押すのを「フイゴ」、足で踏むのを「タタラ」と区別したらしい。画期的な「天秤鞴」が発明されたのは、元禄四年(1691)以降であるから、これらの諸口碑は首肯されてよかあろうと思う。(P19)

もっと具体的には、鉱石の製錬への第一は、原石を鉄鎚で叩き割り、あるいはまた石臼で砕き、ゆり分け、さらに鉛やからみ等を加えて熔解し、銀鉛を抽出する荒吹きを行ない、灰吹によって銀と鉛を分離する。恐らく山弥在世期における、土呂久の銀鉱は良質で、他山でもしばしば見受けたように、採鉱そのままを吹き大工方に渡し、精錬したものであろうか。また土地の口碑によると、その方法は「南蛮吹き」であったと伝え、洋式精錬技術の導入があったものと推定される。主にこの方法は、銀・銅鉱に鉛を合して吹き熔かし、銅・鉛の比重を利用して、銀鉛を採取するもので、一般に「南蛮絞り」といわれる。(P19~20)

輸送ルート

さらに義雄氏によれば、鉱石は銀鉛であって、いわゆる「土呂久馬」に積んで、祖母・傾の山裾を縫うように九折越（1,245 米）から豊後の緒方に入り、府内までも運んだという。いま一つのコースは古祖母山と本谷山の鞍部、尾平越（銚木峠とも、1,200 米）を経て尾平越の長谷川に入る。これが最も古い豊後への路と思われる。（P19）